

若手僧侶に関する動向調査の報告

曹洞宗宗務庁
人事部運営企画室

1. 調査の概要

◇調査の目的

2023年4月に新たに宗務庁に設置された運営企画室は、過疎地寺院振興対策室の取り組みを引き継ぐとともに、それまでの取り組みを総括した資料『過疎地寺院振興対策室における取り組みの総括および今後の方向性についての一考察 - 宗勢に関するデータ分析をもとに -』を曹洞禅ネット寺院専用サイトなどに掲載している。この資料では、「過疎」という漠然とした言葉を用いて宗門の問題や対策を論じることには限界があるとした上で、今後はより具体的な個々の事象について現状把握を進めることが重要であること、さらに、具体的に何を課題として捉えるか、宗門における問題の中心軸を見極める必要があるとしている。

こうした方針を踏まえて、本調査は10代、20代、30代の僧侶を対象を絞り、若手僧侶の動向に関する情報の収集や調査、分析を行い、宗務に関する現状把握や課題認識に資することを目的として実施したものである。少子化を背景として若年層の僧侶が減少していることはすでに認識されているが、より詳細な実態については、これまで把握されてこなかったのが現状である。この調査結果を情報公開することにより、宗門内の現状認識の共有を図り、議論の活性化につなげることを目指している。

◇調査方法

宗務庁で管理している僧侶情報を元に1950年以降の僧侶数等を集計し、年齢や寺院の級階などの情報と組み合わせ、数による動向の分析を行った。各年の年間得度者数と得度時の年代は、僧侶情報の誕生日、得度日等から算出した。僧侶数や教師数、年代は、各年4月1日を基準日として、僧侶情報の誕生日、得度日、除籍日、教師資格の基礎補任日等から算出した。

また、僧堂別の掛搭僧の人数等は、各僧堂から提出される学事報告書をもとに算出した。安居期間や上山時の年齢については、宗務庁で管理している僧侶情報を元に、教師資格の基礎補任時に申請された安居歴の情報から算出した。

他の同様の調査とは数値に差異があることも考えられるが、いずれも2023年11月調査時点の情報を元に、本調査独自の条件で集計を行ったものである。

2. 若手僧侶に関する数の動向分析

◇2000年以降の20年間で年間得度者数は約50%減少

まず、年間得度者数及び得度者数の年代別割合について確認していく。

図1は、1950年から2020年までの年間得度者数の推移を示したものである。年間得度者数は1950年から2000年まで400人から600人前後で増減を繰り返していたが、2000年以降は減少傾向が続き、2020年には246人と20年間で約50%も減少している。

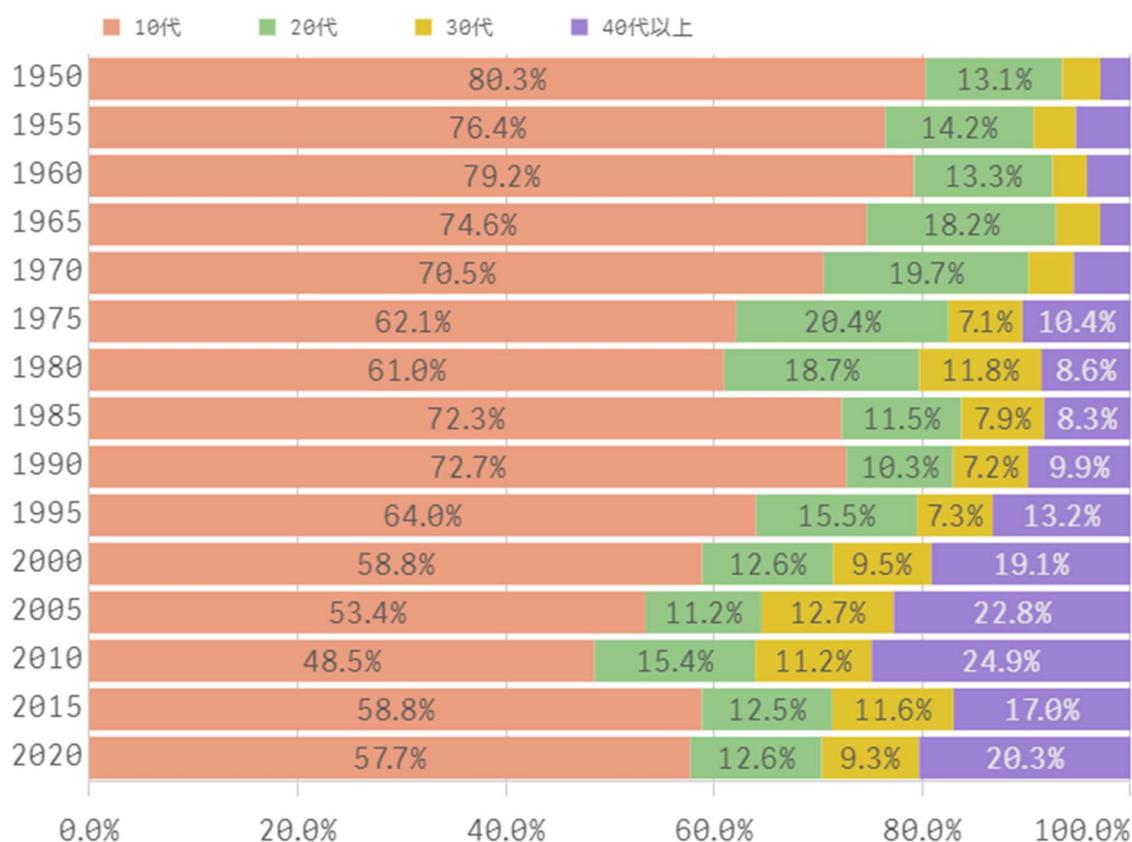
また、図2の得度者数の年代別割合をみると、1950年代は10代から30代が97.1%と大半を占め、そのうち10代は80.3%であった。しかし、2020年までの70年間で緩やかに10代から30代の割合が低下し、2020年には79.7%となり、そのうち10代は57.7%にまで減少した。一方で、40代以上の得度者の割合は年々増加しているように見えるが、それは10代から30代の得度者が40代以上よりも減少しているからである。そのため、上述した2000年以降の年間得度者数の減少傾向は、10代から30代の得度の減少が要因であると考えられる。

図1 年間得度者数の推移



年	年間得度者数	年	年間得度者数	年	年間得度者数
1950年	413人	1975年	520人	2000年	486人
1955年	514人	1980年	561人	2005年	457人
1960年	572人	1985年	541人	2010年	402人
1965年	617人	1990年	487人	2015年	335人
1970年	459人	1995年	453人	2020年	246人

図2 得度者数の年代別割合の推移

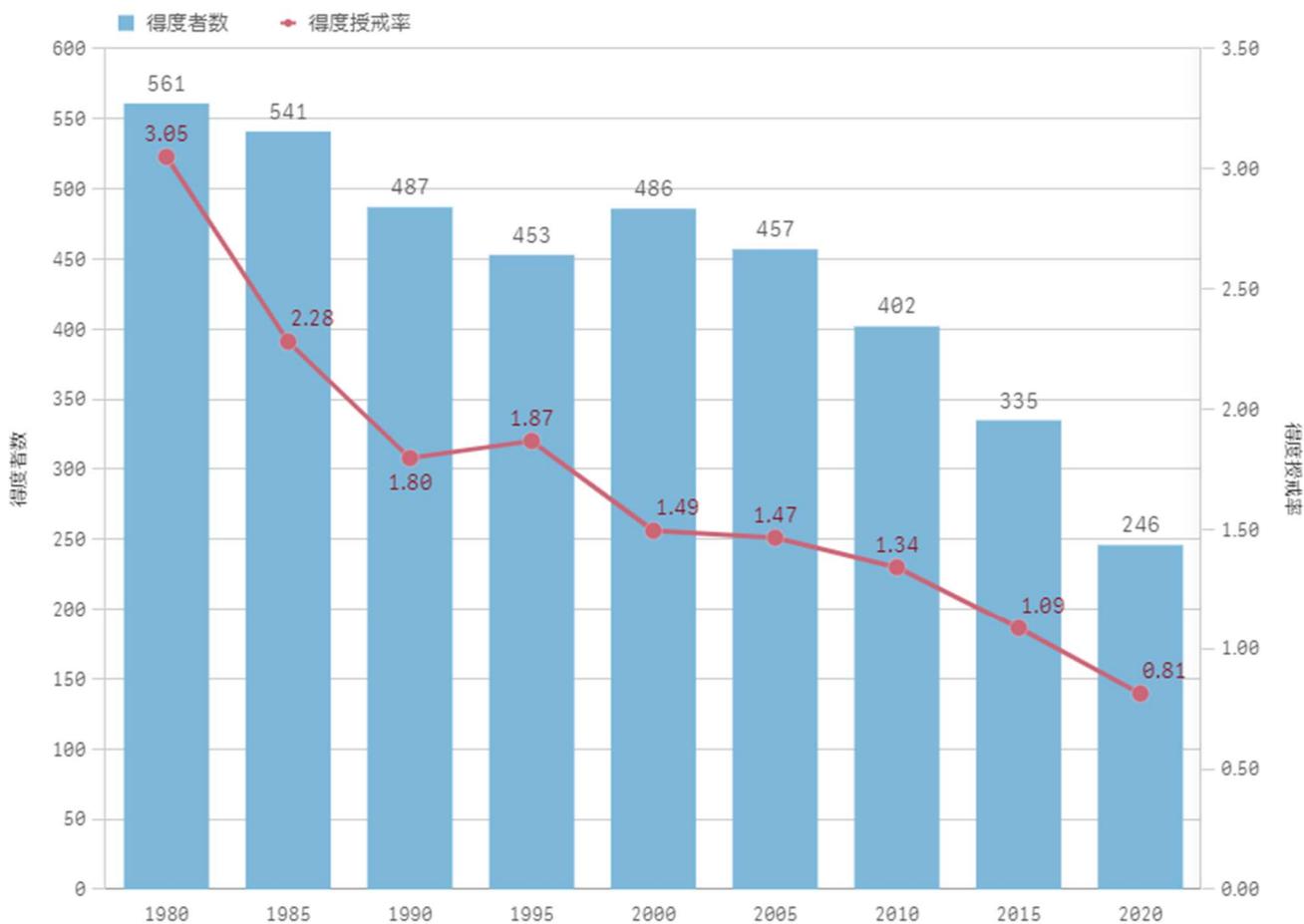


年	得度時の年代			
	10代	20代	30代	40代以上
1950年	80.3%	13.1%	3.6%	2.9%
1955年	76.4%	14.2%	4.1%	5.3%
1960年	79.2%	13.3%	3.3%	4.2%
1965年	74.6%	18.2%	4.2%	2.9%
1970年	70.5%	19.7%	4.4%	5.5%
1975年	62.1%	20.4%	7.1%	10.4%
1980年	61.0%	18.7%	11.8%	8.6%
1985年	72.3%	11.5%	7.9%	8.3%
1990年	72.7%	10.3%	7.2%	9.9%
1995年	64.0%	15.5%	7.3%	13.2%
2000年	58.8%	12.6%	9.5%	19.1%
2005年	53.4%	11.2%	12.7%	22.8%
2010年	48.5%	15.4%	11.2%	24.9%
2015年	58.8%	12.5%	11.6%	17.0%
2020年	57.7%	12.6%	9.3%	20.3%

◇教師数に対する得度者数の指標は 1.00 を下回る

師僧として得度を行うことができるのは教師に限られており、教師には徒弟養成の義務がある。そこで、一人の教師が在籍中に得度授戒を行った徒弟の数を把握するための指標として、教師の数に対する得度者数を算出し、その動向を調査した。図 3 は 1980 年から 2020 年までの教師数に対する得度者数を得度授戒率として示したものである。1980 年は 3.05 と高い値であったが、2020 年には 0.81 と 1.00 を下回っている。

図 3 得度授戒率の推移

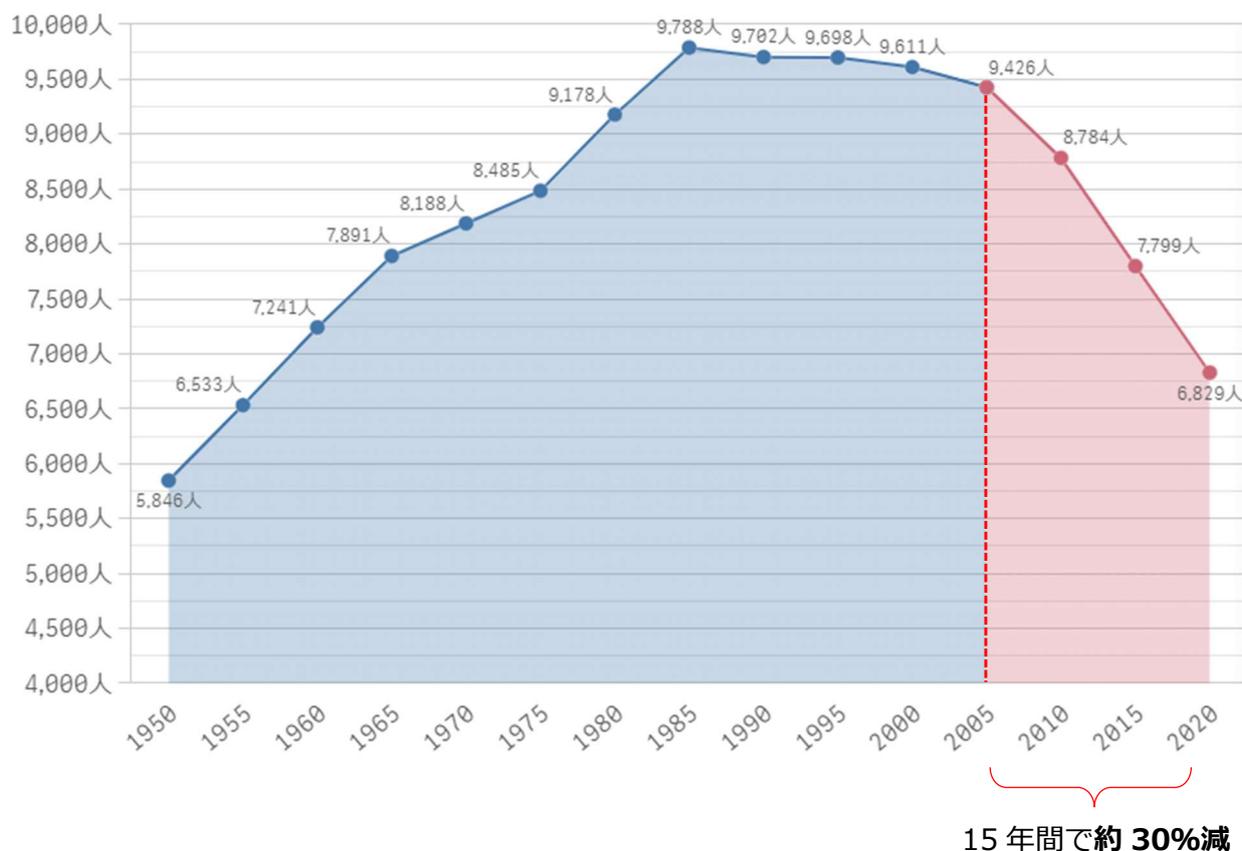


◇2005年以降の15年間で10代から30代の僧侶数は約30%も減少

次に10代から30代の僧侶数の推移について確認していく。

図4は1950年から2020年までの10代から30代の僧侶数の推移を示したものである。10代から30代の僧侶は、1950年から1985年まで増加し続け、1985年には9,788人となった。その後、2005年まではほぼ横ばいの状態であったが、2005年から強い減少傾向に転じ、2020年には6,829人となり、1955年頃の水準まで落ち込んだ。しかし、より深刻なのは2005年から2020年までの15年間で約30%のペースで減少している縮小スピードだと言える。

図4 10代から30代の僧侶数の推移



年	僧侶数	年	僧侶数	年	僧侶数
1950年	5,846人	1975年	8,485人	2000年	9,611人
1955年	6,533人	1980年	9,178人	2005年	9,426人
1960年	7,241人	1985年	9,788人	2010年	8,784人
1965年	7,891人	1990年	9,702人	2015年	7,799人
1970年	8,188人	1995年	9,698人	2020年	6,829人

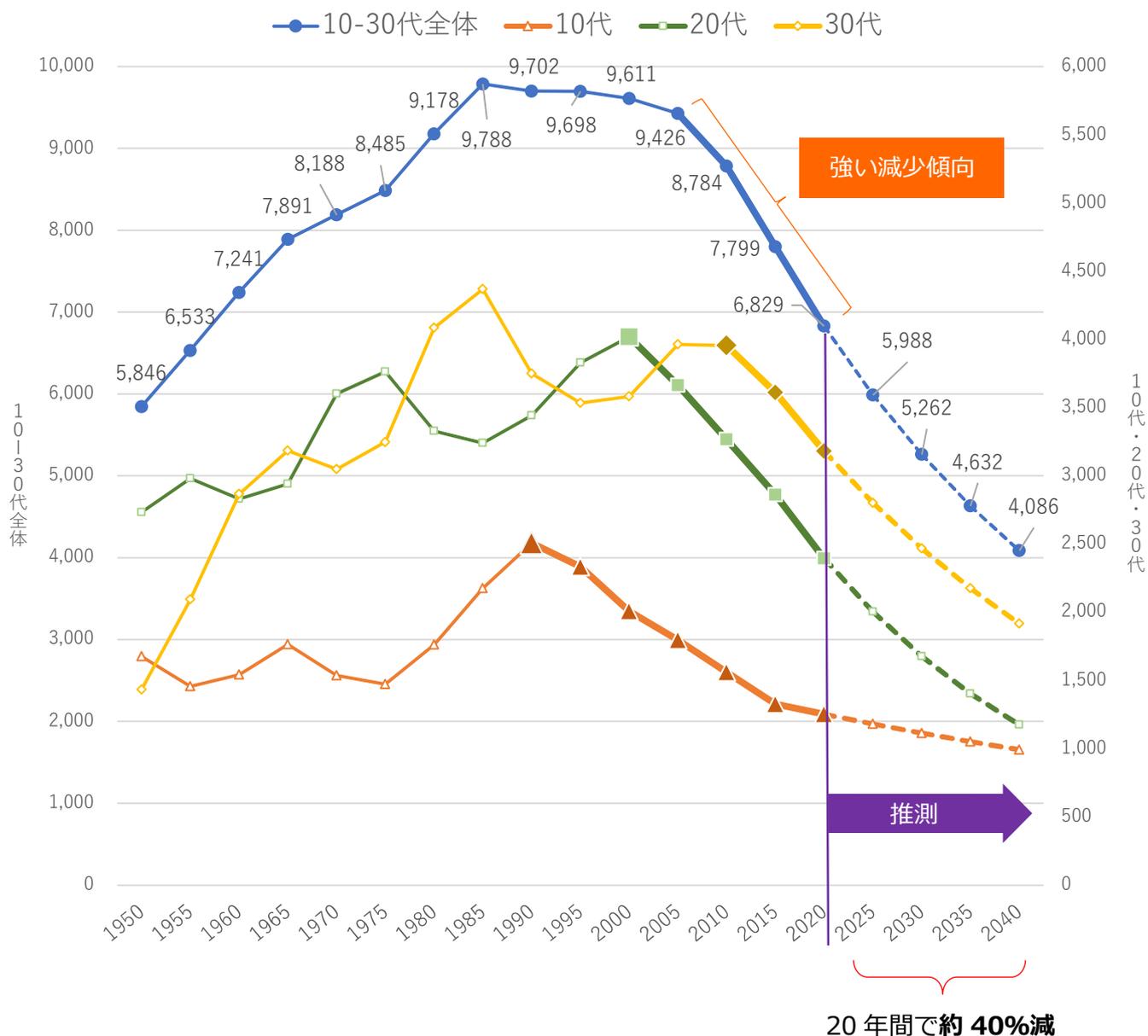
◇2040年には若手僧侶がさらに約40%減少すると推測される

では、前述した若手僧侶数の強い減少傾向の要因について、10代から30代の年代別僧侶数の推移を参考に述べていく。

図5の年代別僧侶数の推移をみると、1990年には既に10代の僧侶の減少が始まっていることが分かる。若年層の得度者数が減少しつづけていることは前述したとおりであるが、10代だけではなく、20代と30代の得度者も減り続けているため、その結果が2000年以降の20代僧侶数の減少、2010年以降の30代僧侶数の減少へとつながり、10代から30代の全体としては2005年以降の強い減少傾向となって表れた。

さらに、10代と20代の僧侶数は2020年時点で既に1950年の数を下回り、30代においては1965年と同程度にまで減少している。そして、このままのペースで減少していくと仮定すると、2020年から2040年までの20年間で若手僧侶は約40%減少すると推測される。

図5 10代から30代の年代別僧侶数の推移



◇若手僧侶の減少ペースは国内人口の減少よりもさらに早い

続いて、10代から30代の僧侶数と国内人口を比較していく。ここでは、直近の2005年から2020年に着目し、10代から30代の僧侶数と2005年比の増減率を図6に、10代から30代の国内人口と2005年比の増減率を図7に示した。

僧侶数の増減は、国内人口の増減によるところが大きいですが、直近15年間では10代から30代の国内人口の減少率よりも若手僧侶の減少率のほうが上回っており、その差が大きくなっていく傾向にある。

図6 10代から30代の僧侶数と2005年比の増減率

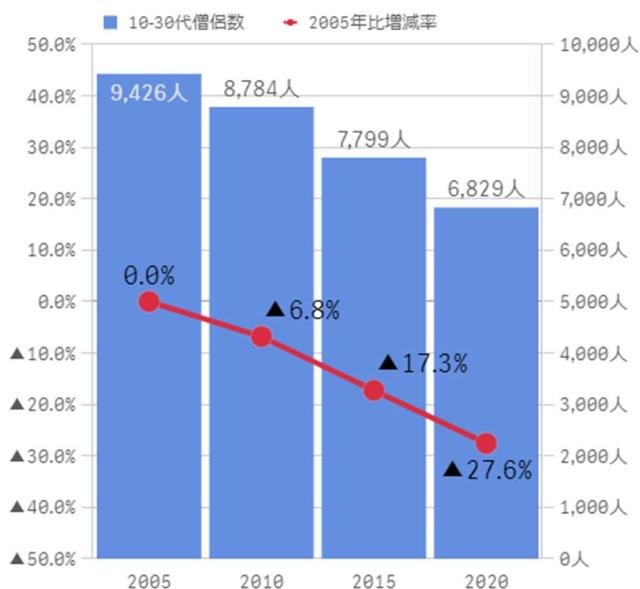


図7 10代から30代の国内人口と2005年比の増減率



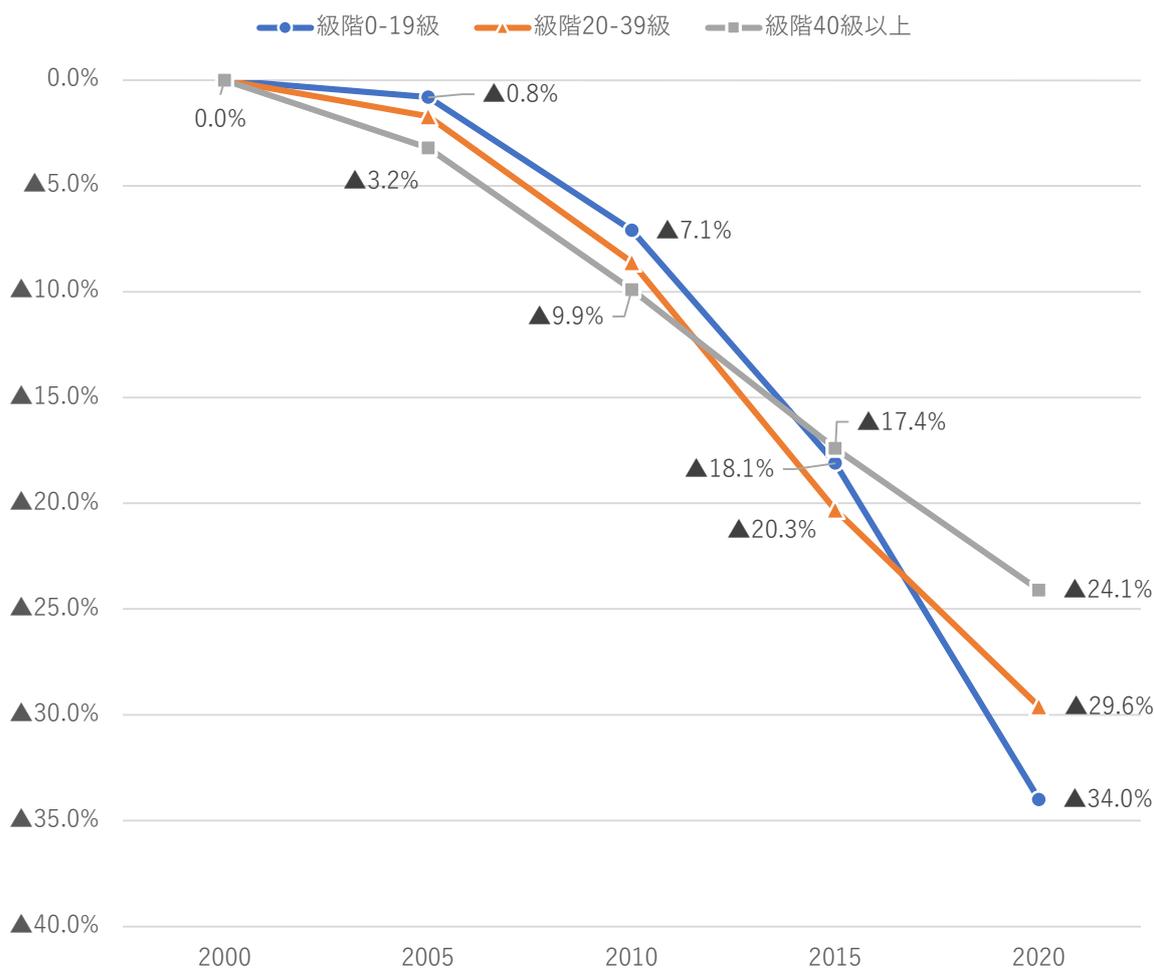
※総務省統計局のデータより運営企画室作成

◇級階の低い寺院に在籍している10代から30代の僧侶数が大きく減少している

さらに、10代から30代の級階範囲別の僧侶数の減少率を確認していく。ここでは、級階を0～19級、20～39級、40級以上の3つに分け、10代から30代の僧侶数の減少率を図8に示した。

2000年以降は、全ての級階範囲で若手僧侶が減少しているが、その中でも2010年から2015年にかけて0～19級、20～39級の減少率が40級以上の減少率を上回っている。さらに、2020年にかけてその差は拡大しており、若手僧侶の減少に級階が関係している可能性がみてとれる。

図8 2000年からの10代から30代の僧侶減少率

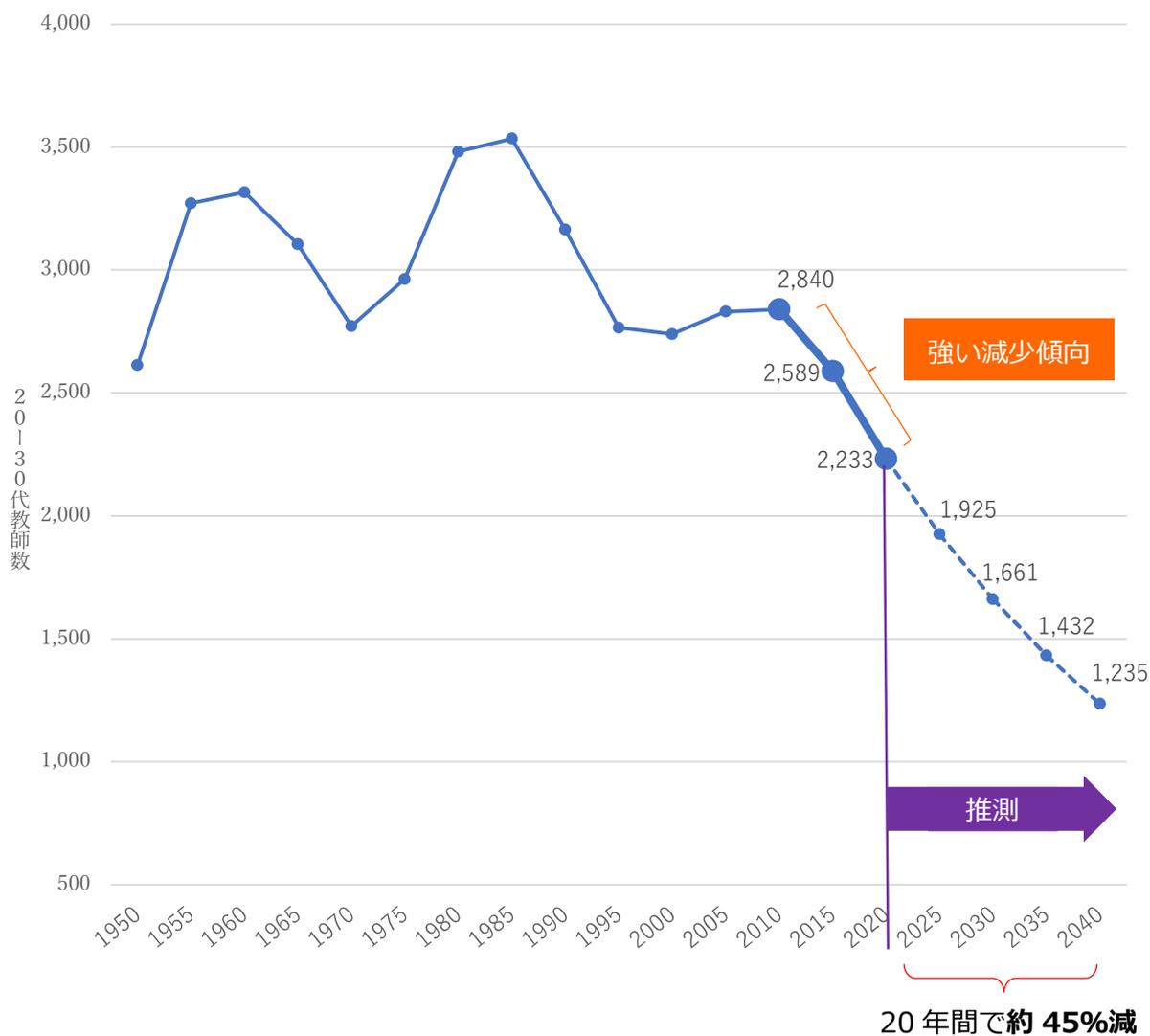


◇2010年以降の10年間で20代から30代の教師数は約23%も減少

次に、20代から30代の教師数の推移について確認していく。図9は20代から30代の教師数を1950年から2020年まで示したものである。

教師数は、1950年から1985年まで増減を繰り返しているが、1985年の3,535人をピークとして、その後は減少が続いている。直近では2010年以降に強い減少傾向が生じ、2020年には2,233人と10年間で約23%も減少し、1950年の水準を下回っている。そして、このままのペースで減少していくと仮定すると、2020年から2040年の20年間で20代から30代の教師が約45%も減少すると推測される。

図9 20代から30代の教師数の推移



年	教師数	年	教師数	年	教師数	年	教師数
1950年	2,614人	1975年	2,963人	2000年	2,739人	2025年	1,925人
1955年	3,271人	1980年	3,481人	2005年	2,831人	2030年	1,661人
1960年	3,316人	1985年	3,535人	2010年	2,840人	2035年	1,432人
1965年	3,105人	1990年	3,165人	2015年	2,589人	2040年	1,235人
1970年	2,772人	1995年	2,766人	2020年	2,233人		

◇若手教師の減少ペースは国内人口の減少よりもさらに早い

さらに、20代から30代の教師数と国内人口を比較していく。ここでは、直近の2010年から2020年に着目し、20代から30代の教師数と2010年比の増減率を図10、20代から30代の国内人口と2010年比の増減率を図11に示した。

僧侶数と同様に、若手教師数の減少は国内人口減少以上であることがわかる。

図10 20代から30代の教師数と2010年比の増減率



図11 20代から30代の国内人口と2010年比の増減率



※総務省統計局のデータより運営企画室作成

3. 僧堂掛搭僧に関する数の動向分析

若手僧侶の減少がもたらす影響のひとつに、僧堂の掛搭僧の人数が挙げられる。そこで各僧堂から提出される学事報告書をもとに掛搭僧の人数の動向を調査した。

なお、本調査での「掛搭僧の総数」は掛搭した期間が各年4月1日から翌年3月31日の間に一部でも含まれている者の総数であり、4月1日以降すぐに送行した者や3月に上山した者なども含まれている。また、ごく短期間の掛搭や入堂前の上山者も含まれている。そのため、掛搭僧の総数は常にその僧堂にいた人数ではなく、あくまで掛搭僧の人数の規模を把握するために用いている。同様に、「新到掛搭僧の人数」は各年4月1日から翌年3月31日の間に新たに掛搭した人数であり、各年の同安居の人数とは異なる。

◇2010年以降の10年間で掛搭僧の人数は大きく減少した

図12は2000年から2020年までの掛搭僧の総数、図13は新到掛搭僧の人数を示したものである。2000年から2010年まで掛搭僧の総数は1,000～1,200人程度、新到掛搭僧の人数は350～400人程度で推移していたが、2010年以降は減少が続き、2020年には掛搭僧の総数は683人、新到掛搭僧の人数は232人となり、どちらも10年間で約37～38%も減少している。なお、本山僧堂、専門僧堂・専門尼僧堂ともに同じような減少傾向であり、特筆すべき違いは見られなかった。

図12 掛搭僧の総数の推移

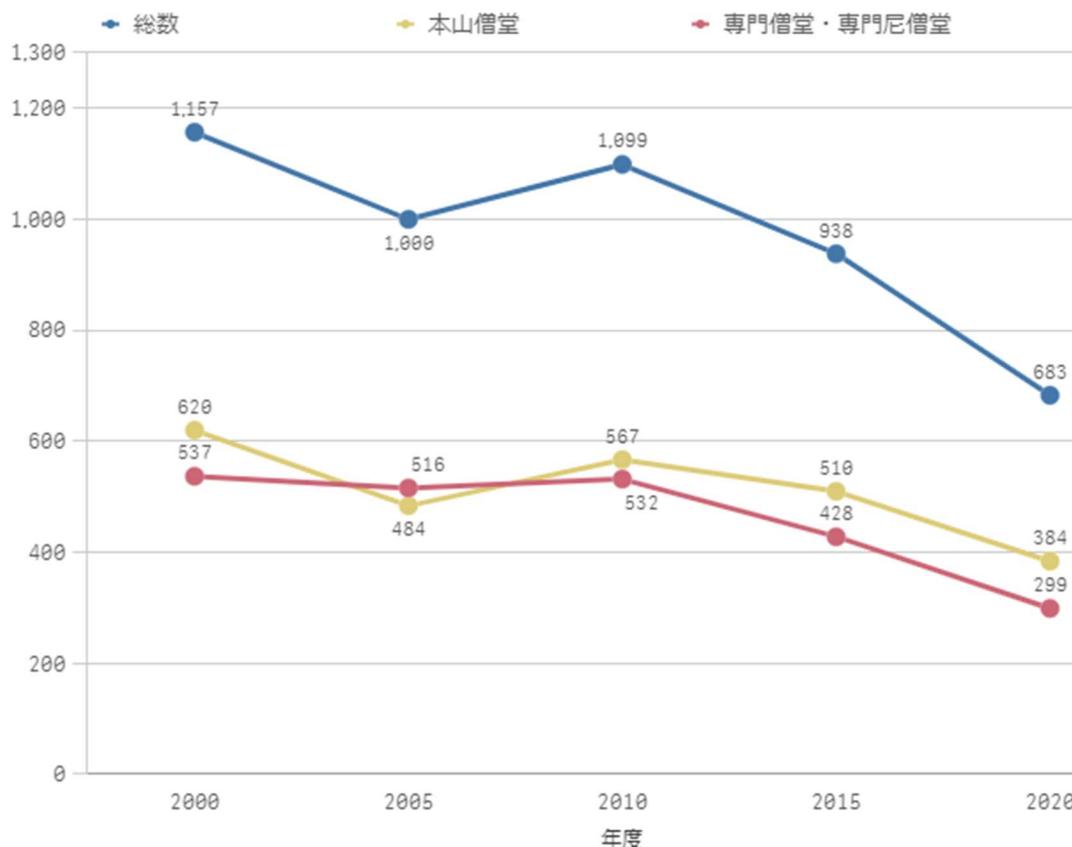
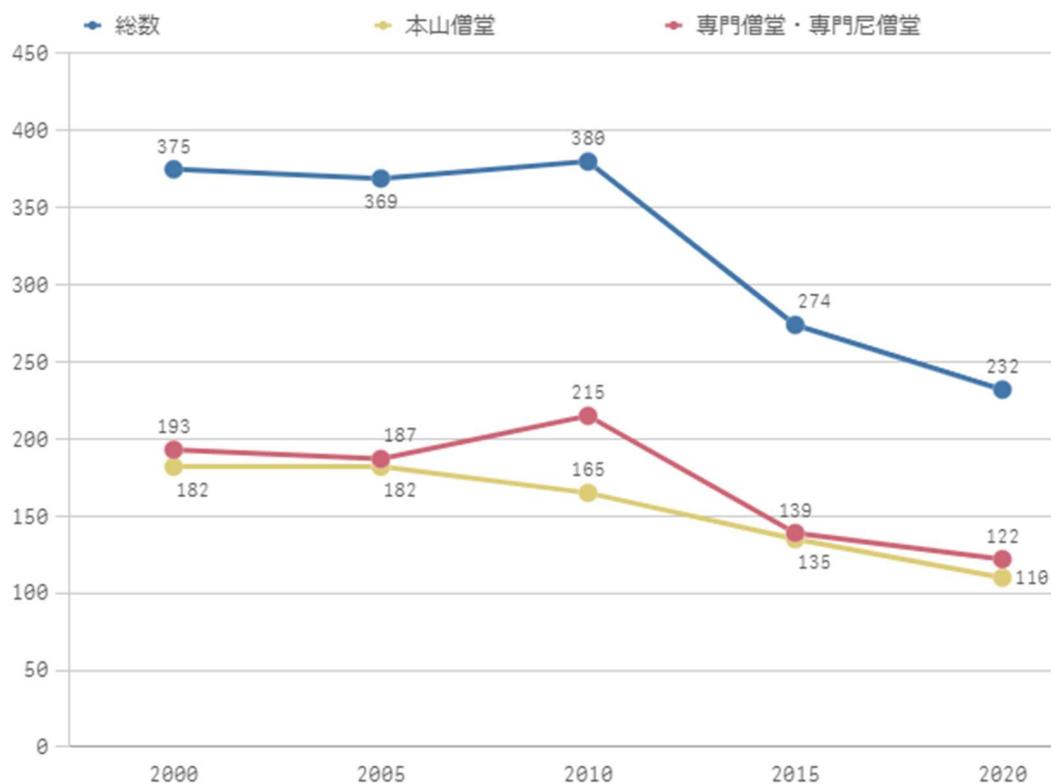


図 13 新到掛搭僧の人数の推移



上述のように若手僧侶数の減少とともに僧堂への掛搭僧は減少しており、今後は更なる減少が推測される。僧堂ごとの望ましい掛搭僧の人数はどのくらいであるのか一概に判断は難しく、単に数の減少だけで問題視することは難しい。しかし、表 1 に示したように、2023 年 4 月 1 日時点の掛搭僧は、大本山永平寺 本山僧堂 128 人、大本山總持寺 本山僧堂 88 人であった。また、専門僧堂・専門尼僧堂では、安居者総数が 0～4 人の僧堂は 4 カ所もあり、10 人以上は 4 カ所にとどまっている。掛搭僧の減少が各僧堂に及ぼしている影響を注視する必要があるといえる。

表 1 専門僧堂・専門尼僧堂の人数別安居者（2023 年 4 月 1 日時点）

	掛搭僧数	僧堂ごとの掛搭僧数	僧堂数
大本山永平寺 本山僧堂	128 人	0 人～4 人	4 か所
大本山總持寺 本山僧堂	88 人	5 人～9 人	8 か所
計	216 人	10 人～14 人	3 か所
		27 人	1 か所
		計	16 か所

※不明 1 か所は含めない

◇掛搭僧の年齢の変化や掛搭期間の短期化、長期化の動向は見られない

次に、安居期間と上山時の年齢についても調査を行った。

図14は2000年から2015年までの上山時の年齢ごとの割合を示した。20歳から24歳までが全体の45～50%前後と多く、次いで25歳から29歳までが15～20%前後であり、20代の占める割合は全体の6～7割である。また、図15は2000年から2015年までの安居期間別の割合を示した。安居期間が1年から2年未満の占める割合が多く、30～40%前後となっている。なお、2000年から2015年ではこの傾向に大きな変化はなく、掛搭僧の年齢の変化や掛搭期間の短期化、長期化といった動向は見られなかった。

図14 僧堂上山時の年齢ごとの割合

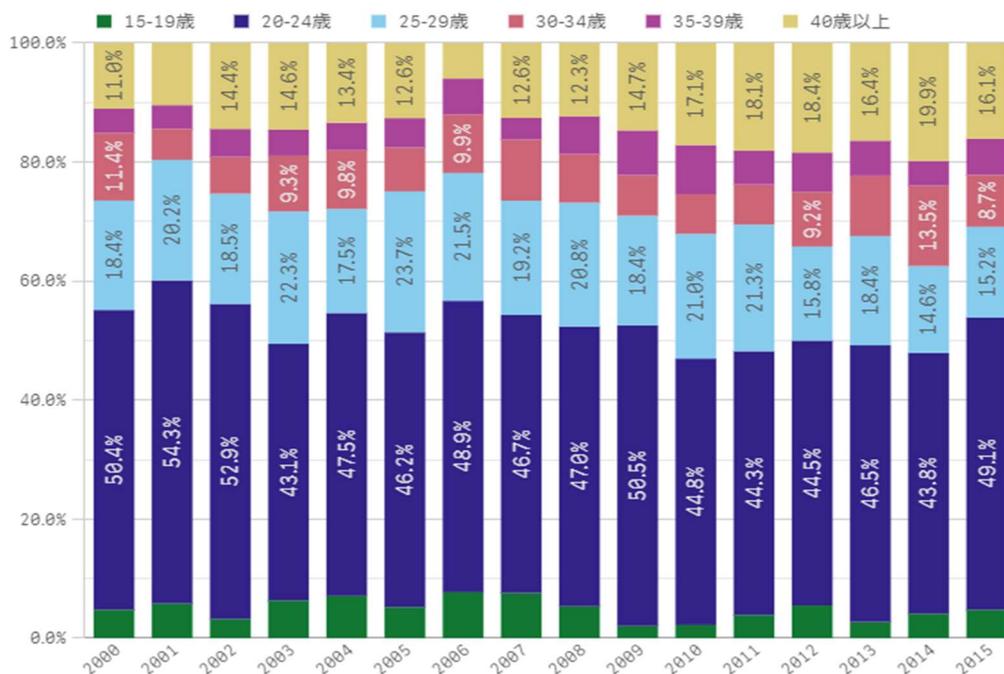
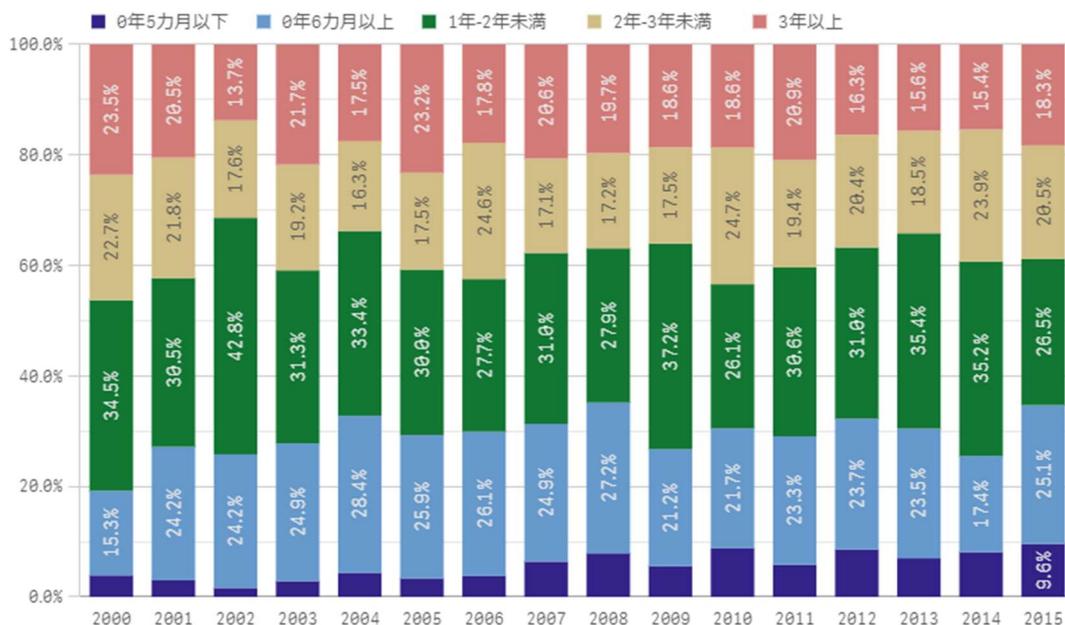


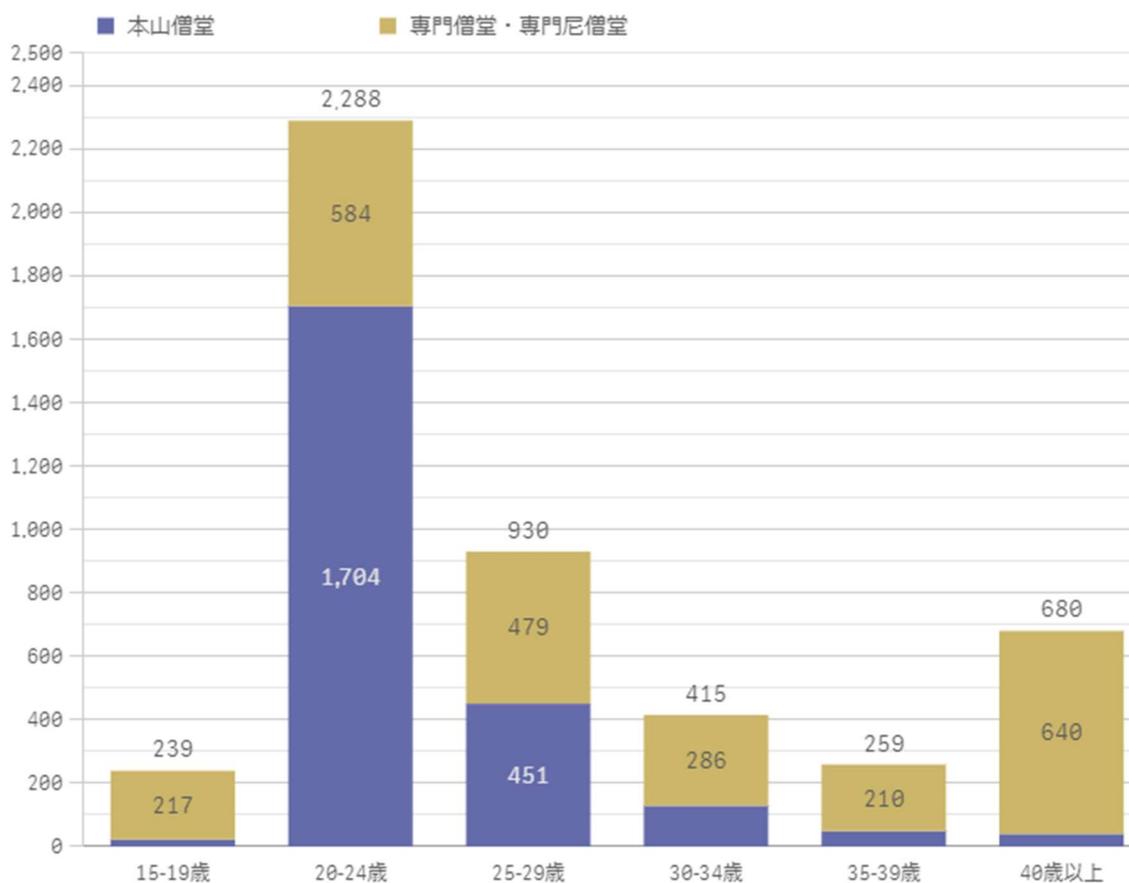
図15 安居期間別の割合



◇20代前半は本山僧堂への上山者が7割強、40代以上は専門僧堂等への上山者が9割以上
上山時の年齢については、本山僧堂と専門僧堂・専門尼僧堂で違いに特徴が見られた。

図16に示したように20歳から24歳では本山僧堂への上山者が顕著に多く、74.5%も占めている。
また、25歳から29歳までは約半数ずつ、それ以外の年齢では専門僧堂・専門尼僧堂の割合が高くなる
傾向があり、40代以上では9割以上が専門僧堂・専門尼僧堂への上山者であった。

図16 僧堂上山時の年齢（本山僧堂と専門僧堂・専門尼僧堂の比較）



4. まとめ

ここまで様々な観点から若手僧侶の動向を調査し、その分析結果を述べてきた。若年僧侶は少子化を背景として減少が進んでいることは認識されてきたが、今回の調査からより具体的な動向が見えてきた。ポイントをまとめると次のとおりである。

- ・年間得度者数は2000年から2020年の20年間で約50%減少し2020年は246人。教師数に対する得度者数の指標である得度授戒率は、2020年には0.81と1.00を下回っている。
- ・10代から30代の僧侶数は2020年に6,829人で、15年間で約30%減少。20代から30代の教師数は2020年に2,233人で、10年間で約23%減少しており、縮小スピードが深刻である。
- ・このままのペースで若手僧侶が減少していくと仮定すると、20年後の2040年には僧侶数はさらに約40%減少の約4,000人、教師数は約45%減少の約1,200人と推測される。
- ・若手の僧侶数や教師数の減少ペースは国内人口の減少よりもさらに早い。また、級階の低い寺院に在籍しているほうが大きく減少している。
- ・僧堂への掛搭僧の年齢の変化や掛搭期間の短期化、長期化の動向は見られなかったが、掛搭僧の人数は2010年以降の10年間で大きく減少。

若手僧侶の減少とその縮小スピードが、実際にどのような影響をもたらし、何を問題として捉えるのかは、分野ごとにさらに把握していく必要がある。今回は、一例として僧堂の掛搭僧の人数を挙げたが、掛搭僧の減少が僧堂の運営や教育にどのように影響しているのか把握しなければ、具体的な課題は見えてこない。若手僧侶は、将来的には次世代や次々世代の寺院後継者として考えられるが、すでに寺務や檀務において住職を補佐し、様々な行持や役割を担い、宗門の行学、教化を担う主要な構成員であり、若手僧侶の減少がもたらしている影響は様々あるはずである。今後もその現状把握に資する調査を継続したい。

〈本調査に関するお問い合わせ〉

曹洞宗宗務庁 人事部運営企画室

TEL：03-3454-5411